

ラグビークラブチームにおける1シーズンの傷害調査

○山下 明宏^(RPT) (やました あきひろ)¹⁾, 高田 彩加^(RPT) ¹⁾, 岸川 昌嗣^(RPT) ¹⁾,
島本 大輔^(RPT) ¹⁾, 吉矢 晋一^(MD) ²⁾

¹⁾ 西宮回生病院 スポーツ整形外科センター リハビリテーション科

²⁾ 西宮回生病院 整形外科

【目的】

ラグビークラブチームで発生した外傷・障害の実態を調査し、その結果を外傷・障害予防の一助とすることを目的とした。

【対象】

R ラグビークラブチームに2018年から2019年に所属した40名とした。

【方法】

1シーズンの外傷・障害調査を実施し、受傷部位、疾患名を分類し、受傷後24時間以上練習および試合に参加することのできなかった外傷・障害を記録した。診断は医師が行った。統計的分析は、重症度、発生別要因、ポジション別の比較は χ^2 検定、競技復帰までの比較はt検定を用い有意水準は5%未満とした。

【結果】

外傷・障害発生件数は51件で、Injury Ratio (以下IR) は4.1/1000player hours (以下ph)であった。練習では1.04件/1000ph、試合では39.5件/1000phで、試合での受傷が有意に多かった。受傷部位は頭頸部15件、下肢25件であり、下肢25件中、膝関節12件、大腿部6件、足関節5件で多かった。疾患に関しては靭帯損傷14件、肉離れ8件、裂傷5件、脳震盪4件、骨折2件であった。

【考察】

R ラグビークラブチームの試合IRは39.5/1000phで、ラグビークラブチームを対象とした先行研究のIR 52.5/1000phより低かったが、トップリーグを対象とした先行研究のIR 35.2/1000phとは同等の結果となった。また、受傷部位は膝関節・頭頸部が有意に多かった ($p < 0.05$)。さらに、膝関節疾患ではPCL損傷やMCL損傷が有意に多く ($p < 0.05$)、重症度も高かったことから、膝関節疾患に対する予防や競技復帰後の再発予防対策も必要である。